

【配布部数】名古屋 7万3004部 2009年日本ABC協会認証部数

【おもな配布地域】名古屋全域(中区・中村区・千種区・東区・北区・名東区・西区・熱田区・南区・その他) 愛知、岐阜、三重のオフィス集中地域  
シティリビングは札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、福岡、8エリア86万部をネットワークしています。

●紙面に企業名が見出しとして表示されているものは、その企業からのPR情報です。  
●本紙掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。  
●表示価格で特記事項のないものは消費税額を含んだ総額表示です(免税・非課税商品は税が転嫁されません)

名古屋リビング新聞社 〒460-0007 名古屋市中区新栄1-6-15 (配布) ☎052(957)6460 (記事・広告) ☎052(269)9514 ☎052(269)9512

シティリビングは再生紙を使用しています

# 働くWomen's'ル 03

輝いている女性たちをつなぐ

ドキュメンタリー監督

今村彩子さん(33歳)

聴覚障がいを持つサーフショップのオーナーの日常を追ったドキュメンタリー映画「珈琲とエンピツ」。言葉を交わさなくても人と人とは通じ合える。映画を通してそんなメッセージを送る監督の今村彩子さんにインタビューをしました。彼女もろう者。ときに筆談で、ときに笑顔というツールで伝えてくれた今村さんの想いを、体中で感じて。



「一生懸命に走り続けた20代。30代はこれまでの経験と、出会う人たちとの関係が生きてくる」

愛用のカメラは8年間使い続けているそう。撮るテーマを意識して探すということではなく、日々の生活の中で自然と決まってくるのだとか

**映画監督になろうと思ったきっかけは?**  
「小学生のころ、テレビを観ても理解できない私に、父が映画「E.T.」の字幕版を借りてきてくれました。それ以来映画のおもしろさに夢中。映画を撮りたいと思うようになったのはそのころからです」  
**ドキュメンタリーというジャンルを選んだ理由は?**  
「私が撮りたいのは、人の生き様(さま)。それを観客の心にもトレイトに伝えられる力をドキュメンタリー映画が持っているからです」  
**「珈琲とエンピツ」の主人公である太田辰郎さんの温かなオーラに癒やされました。太田さんの第一印象は?**  
「人をすごく大切にする人だな、と思いました。人と自然体で接している姿が印象的でした」

**わたしたちは?**  
「それまでの私は、聞こえる人と聞こえない人、というように、人を区別して見ていました。でも太田さんは違った。耳の聞こえない人も聞こえる人も分け隔てなく接している姿を見て、自分もそうありたいと思うようになりました」  
**作品中で「タプー」について取り上げるシーンがありました。タプーについて監督はどう考えますか?**  
「たとえば目の見えない人に対して、どうして目を見えなくなったの?と聞くことをタプーと感じてためらうのは、目が見えた方がいい、という考え方が前提にあるから。でも当事者にとっては見えないことが当たり前。それが弱みだとは思っていません。タプーを作っているのは自分なんだということに気付くことが大切だと思います」



編集も自分で。大好きな映画「E.T.」のフィギュアがキーボードにちょこんと乗っているのが印象的でした

**社会の、ろう者への理解を深める取り組みは進んでいてると思えますか?**  
「福祉教育は充実してきていると思います。また、震災などが起きたときに警報をメールで知らせるサービスを始めた企業があると聞きました。命に関わる情報に格差があってはならないと思うので、そのような取り組み

**作品を誰に一番観て欲しいですか?**  
「街を歩くカッパル、高校生、家族連れなど、身近に接する人の私の映画を観て欲しいのはそういう普通の人たち。彼らの心に届く作品を作り続けたいと常に思っています」  
**現在撮っている作品は?**  
「一組の家族に密着しています」

**リフレッシュの方法は?**  
「とにかく体を動かすこと! 監督という仕事は体力が重要なのでよく近所の公園でジョギングをしています」  
**シティ読者にメッセージ**  
「20代は一生懸命に突っ走れば良い。30代はこれまでの経験や出会った人たちとの関係が生きてきます。私は今33歳。人の縁の大切さを実感しています。縁を大切にすることが自分の世界を広げると、人生が豊かになる代はもっと楽しい生活が待っていると思います!」

### マネージャー's eye

マネージャーとして今村さんを支え続けてきた母親の加代子さん。監督のことを「中学生のころから問題意識をはっきりと持っている子ども。新聞の読者発言欄に投稿したり、金山駅で署名活動をしたり、行動力は昔から人一倍ありました。ときどき見ているハラハラするくらい。でもそれが彼女の長所でもあります」と話します。世の中に対して叫びたいことがあれば、ためらわず伝える力。その力が、たくさんの人々の心を揺さぶる作品作りに役立っているようです。

### 「珈琲とエンピツ」

監督/今村彩子  
プロデューサー/阿久津真美  
★6月30日(土)、伏見ミリオン座  
ロードショー

1979年生まれ。19歳で渡米し、映画やアメリカにおけるろう文化などについて学習。帰国後にドキュメンタリー制作をスタート。ろう者をテーマにした作品を通して、人の価値観は一つではないことや、言葉を越えたコミュニケーションの大切さを伝え続けています。映像制作の一方で、名古屋学院大学と愛知学院大学で非常勤講師として手話などを教えています。